

# 交通 評論



2倍以上が記録されて  
いる。

従来、この季節の南  
岸低気圧による雪は予  
報官泣かせといわれて

今年は2月になって、首都圏で2回大雪警報が出た。45年ぶりの大雪は2回とも週末とぶつかつたが、車の事故が多発し公共交通は運休や間引き運転、空や海の便も乱れ、首都圏の交通はまひした。

中旬の大雪は関東・甲信越で記録的なもので、その被害、特に農業被害は甚大なものになった。予想を上回る積雪が各地で観測され、「量的な予測精度が不十分だった。予報技術の向上に努めたい」と気象庁長官が定例記者会見で述べたように(東京新聞2月21日)、予想された積雪量の

い怒りは予報に向けられ、少しでも外れば呪いの言葉も吐きたくなるものである。

さて、45年前の大雪は1969年(昭和44年)の3月だったろうか。この年は1月に安田講堂の攻防があ

## 首都圏の大雪

土器屋 由紀子

めたり、すかしたりしながら雪道を歩き、天気予報を恨んでいたと思う。その10年後に気象研究所に採用されるとは思っていなかつたので、悪口の対象は当然のように気象庁であった。

名で第3種の国家公務員である。原則として全寮制、卒業すると2種に格上げされて各地の気象官署に配属される。

ところで、36年も首都圏は大雪であった。この年の2月26日、青年将校によるクーデター未遂事件が起り、以後日本は戦争への道に突き進んでしまった。子ども頃、祖母や母から「あの時はひどい雪だった」と聞かされていたが、首都圏の大雪を見て二・二六事件を思い浮かべる人はもう少なくなつた。

倍率は100倍とも200倍ともいわれる難関校である。大学の教科は地球物理学中心であったが、教養科目として語学や哲学、化学の教官もおり、筆者は化学担当として11年近く勤務した。少人数なので学生同士や教官との間も親密で家庭的である。

卒業してもどこかの官署で交流が続く。一生懸命頑張っていた当時の卒業生たちが、いま中堅職員として予報業務を担っているが、地震、津波、竜巻など激甚災害が増えており、今回のような豪雪予報の精度の向上にも頑張ってもらいたいと思

り、東京大学の入試が中止された年であった。当時、農学部職員だった筆者は、都電が止まってしまった大雪の本郷通りを保育園帰りに苦労したことを思い出す。

後年、気象大学の化学の教官に転動したが、そこで出会った学生は予報官の卵たちで大変優秀だった。22年(大正11年)に当時の東京気象台に測候技術官養成所として設置され、戦後、62年から気象大学校になったが、学生は1学年15

卒業してもどこかの官署で交流が続く。一生懸命頑張っていた当時の卒業生たちが、いま中堅職員として予報業務を担っているが、地震、津波、竜巻など激甚災害が増えており、今回のような豪雪予報の精度の向上にも頑張ってもらいたいと思

何となくきな臭い。卒業生やその子どもたちが戦争に巻き込まれる日が来ないことを祈っている。(江戸川大学名誉教授)